

教師という仕事

—— 偶然か必然か、自分史を語る ——

播 本 秀 史

はじめに

高校教員 20 年, 大学教員 23 年をもって, 2020 年 3 月に退職します。43 年間の教師生活となります。これを一期として, 私にとっての教師という仕事をエッセイ風に述べさせていただきたく思います。

教師に対して, 複雑な思いを抱いてきた。一つは一種の違和感であり, 今一つは感謝の思いである。いずれにしても, これまでの自分史に由来する。私にとって教師というものが何であったのかを総括してみたい。

1. 小学校の恩師

小学校時代の忘れられない恩師は川瀬正一先生である。4 年生と 6 年生の担任であった。5 年生の時は担任との人間関係か, 意欲も成績も下降し自信を失っていた。6 年生の時, 算数だったか, 解くのに時間がかかったことがあった。川瀬先生が, 出来ない児童に何か指示を出された。その際「播本は別よ, おまえやかし, ようできるやないか」と言われた。先生がそういう風に思ってくれていることが嬉しかった。勇気をいただいた。逃げの心, 安逸な気持ちに陥るのを防いでくださった。授業中もよく指名された。だいたい初めに質問が

教師という仕事

来た。よく鍛えてくださった。かわいがってくださった。

また、私たちの時代は給食費を担任が集めていた。その際、払えない児童に向かって「きょう持ってこられなくてもええけん、せこいのはよう知つとるけん」と言われた。「せこい」というのは「苦しい」の意である。「ええけん」は「いいですよ」の意。経済的に苦しい君たちの家の状況はよく知っているよ、君の責任ではないよ、劣等感を持つ必要はないよ、とその子を安心させていた。貧しい家庭の子どもに対するまなざしと言葉かけに、一人ひとりに対する愛情が感じられた。手足を伸ばせるような気持ちになれた。

ある日の校舎外の清掃のとき、先生がトイレの清掃をしていた。今とちがって、汲み取り式の便器の中に竹や手を入れて何かされていた。詳しくは分からないが、とにかく先生が汚物のなかに手を入れて取り組んでおられたことに圧倒された。ゴム手袋をされていたかどうかもはっきりとは覚えていないが、先生の大きな愛情は感じとれた。

小学校卒業式の時、先生に駆け寄りお礼を述べたが言葉にならなかった。卒業後から音信は途絶えたが、再び交流は、私の高校入学時から始まった。地方紙の「徳島新聞」に高校別の入学者の名前が掲載された。先生はそれをご覧になられたのだろう、なんと葉書きを頂戴した。「入学おめでとう。徳商は私の母校です……」。先生は徳商卒業後師範学校を出て教師になられた。以後、高校時代、大学時代、結婚後もお付き合いは続いた。幾度か先生のご自宅に伺うようになった。晩年、娘さんの近くで住まわれるため岡山に転居された。そこに妻子ともども、先生のご自宅を訪問させていただいた。道に出て私たち家族を待っていてくださり、車の私たちに向かって手を振ってくださった。1階のリビングにベッドが置かれていた。その時先生はお一人で暮らしておられた。ご近所に親切な方がいるので安心というお話をされていた。これが先生とお会いした最後であった。

2. 中学時代

中学時代にもさまざまな先生方に教わった。思い浮かぶ先生方も何人かいらしゃる。しかし、恩師と呼べる方には出会わなかった。代わりにこの時代では恋をした。今更書くのは気恥ずかしいが、恥を忍んで書かせていただく。中学3年になる春休みに生木を裂かれるような別れを経験した。とても大切に思っていた人が転校した。生まれて初めての喪失感だった。ある意味、ここから私の人生が始まったかもしれない。初めて本格的小説も読んだ。当時の心境と合っていたのか、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』という本だった。ゲーテ自身も「あの本は出版以来たった一回しか読み返していないよ。そしてもう二度と読んだりしないよう用心している。あれは、業火そのものだ！近づくのが気味悪いね」と言っている。当時はもちろんそんな本だとは知らなかった。私も強烈に死を意識してしまった。さすがに実行に移すことはなかったが。ゲーテ自身、シャルロッテをめぐって深刻な経験をした。しかし、ウェルテルは自殺したが、ゲーテは生きた。私の人生もこの方向を歩んできたといえよう。

3. 高校時代

高校は徳島県立徳島商業高等学校（徳商）に入学した。失恋の影響か中学3年生のとき、勉強が手につかなかった。怠け者の弁解かもしれないが、それでも、徳商に入るということで、入学前の春休み、当時まだあった「丸新」というデパートで比較的高価なそろばんを買った。ところが、その頃、音信不通だった失恋したはずの人が訪ねてきた。自分なりに、商業高校を出てからの人生設計を漠然と考えていたが、それが大げさにいえば、「吹っ飛んで」しまった。その人は東京の某私立女子大学の付属高校に行くらしい。諦めていた心に

教師という仕事

希望の灯がともったが、なんで今更と心は乱れた。しかし、この出来事がなければ、全然ちがう人生を歩んだだろう。その人がいたから私は大学へ行こうと軌道修正をした。その意味で恩人である。

徳商は大学進学を旨とする高校ではなかった。また、ショックだったのは生徒手帳に「この学校は中堅産業人を育成する学校である」と書かれていたことだ。今なら別の考えもあるが、何しろ15歳の少年である。なにか、自分に棒がはめられたような気がした。今の学校目標にこの文言は見当たらないようであるが。ただ、2年次から「進学クラス」がクラス設けられていた。これは私にとっては天恵であった。商業科の勉強が少ない分、多少なりとも大学進学のための勉強はできた。

長髪問題

徳商は旧制徳島中学とならんで戦前からの学校であった。硬式野球は甲子園で優勝、準優勝したことがある。また、サッカーや柔道などでも全国クラスの学校であった。徳島では伝統ある名門校である。私たちの頃は女子生徒の方が多かった。男子は制帽に詰襟の学生服、制帽とボタンは「tcs」のマーク入り、Tokushima Commercial high Schoolの意である。それに男子は伝統的に坊主頭であった。3年生の時、私たち進学クラスの男子生徒が坊主頭反対の署名活動を行った。署名活動の青写真は親友のM. A.と私が書いた。ただ、その時署名に走るAを私は止めた。ちょうどその日の徳島新聞朝刊に徳島工業高等学校の生徒が校庭に座り込みをした記事が写真入りで報じられていたからだ。Aはチャンスと捉えたが、私は、目立たない形で署名を集める方針だった。1969年の秋だった。Aはこの時とばかりに級友に呼びかけ男子の約半数の者がそれに応じて各教室に飛んだ。結果は思ったとおりだった。すぐ見つかり十数名は生徒指導の特別指導を受けることになった。やがて、行かなかった私も呼び出しを受けた。報道を受け、ナーバスになっている学校を刺激してしまったが、別

に悪いことをしたとは思っていなかった。しかし、生徒指導部長、学年主任、教頭、校長から次々と「説諭」をいただくことになった。この一連の経験が教師への違和感の元となった。

そもそも、私たちがいけなかったのは、学校に無断で署名活動をしたことによる、とのことだった。なんだかもよもやする気持ちになった。異議申し立てをする当の相手の許可をもらう必要があるのだろうか。とはいえ、私たちは指導を受けている立場でもある。しかし、民主的な主権者の卵として正しい行為をしたという思いも強かった。褒められこそすれ「説諭」を受けるようなことをしたのだろうか。先生が、君たちの気持ちも分かるけど、しかし、ね、という風に言ってくだされれば、どこか戸惑う姿勢があれば、私もそれなりに納得できたろうが、それが全くといってよいほどなかった。正しさは先生の側にあった。徳商の伝統に「泥をぬる行為」として断罪された。

保護者（当時は父兄とよんでいた）が呼びつけられた。校長室で次々と父兄が諭されていた。「困るんですね、こういうことされちゃ」「徳商の伝統に……」。と説明していた。父兄は「全くうちの子が申し訳ありません」式に平伏していた。どういう訳か、運転手付きの黒い車で父が駆け付けた。父は少しロングヘヤーであった。開口一番、「徳商はまだこんなことやとるんですか？」先生の様子が一変した。先生がなんだか恐縮の姿勢になった。驚いた。先生たちが正しいと思っているのなら、父に対しても他の保護者に話していたように話せばいいではないか。へつらうような姿勢に、なにか嫌なものを見た思いだった。この「事件」がきっかけとなって、伝統の坊主頭から、一応長髪が認められた。

しかし、そんな徳商ではあったが、ここでも得難い恩師にめぐりあっている。小野寺稔先生である。小児麻痺で右足が不自由で金属製の補助器を使われていた。いつも前向きで澁刺とされていて、明るく、物事を善意に受けとめられる先生だった。副担任だった2年生も担任だった3年生もクラスの多くの生徒か

ら慕われていた。人の好いところを見つけ、そこを伸ばすよう促す先生だった。何度も先生のご自宅にクラスメートと押し掛けた。大学に入ったときも、自分のことのように喜んでくださった。都立高校の教員となったときも報告に伺った。「播本はどんな教師になりたい？」と聞かれた。教材研究をしっかりと教える内容を……などと話した。すると「播本は学者タイプだからな、でもな、名前覚えよ～」とおっしゃられた。このことの重要性は教員となってよくよく分かった。至言であった。先生が亡くなられた時（大学が夏休み中）卒業後半世紀近く経っていたが、クラスメートが何人も来ていた。家族ではなかったが喪主の方をお願いして先生のお骨を拾わせていただいた。親友のK. M.とM. A.が一緒だった。涙がとめどなく流れた。

4. 大学時代

高校時代は全く意識にのぼっていなかった立教大学に一浪の末入学した。妥協できるところは哲学科ではなかったが、その勉強もできる学科ということだった。上京して間もなくの予備校時代、父から手紙がきた。そこに次のような文面があった。その後の私の人格形成に深いところで関わっているかもしれないので、ここに紹介したい。

- ◎ 学ありて心なきものかなしけれ 心に学べよしあしの道
- ◎ 学びの子くらき夜道のともしびに 我れなきのちも光かがやけ
- ◎ 吾子たどれ荆の道もかきわけて 我が手で拓け眞実の道
- ◎ 極むれば極めて深し人の道 極めかなわぬ我れに代わりて

昭和四拾五年 六月三十日 オヤジ

ところが、入ってみると私の期待するところとかなり違っていた。哲学の科

教師という仕事

目はほとんどなかった。キリスト教学科というところで、聖書やキリスト教史、神学に関することがほとんどだった。入試要項で「現代哲学」もできるはずだったが、担当の教授はカントの専門家だった。ただ、一般教養でブーバの「我と汝」を研究できたのはためになった。教職科目は徳商時代の教師への不信感で1,2年は履修しなかった。1年生は専門科目以外ほとんど出席しなかった。何のためにこんな勉強しているのか分からなかった。ところが、専門科目は全てAであった。まだ、Sがない時代だった。より虚しさが増した。

かつお船

大学2年生のとき、カツオ船に乗った。クラスの女子で清水出身の子がいた。ダメ元でカツオ船に乗りたい旨を相談した。「お父さまに相談してみます」という返事もらった。なんでも運送会社の社長でカツオ船関係とも交流があるとのことだった。夏休みに乗れることになった。三重の船で「第28清辰丸」299トンの船。焼津に向かう前日、新聞販売店に新聞代の精算に行った。家族宛てに遺書を書いて机の引き出しにしまった。客観的にみると大げさな話だが、そういう心持ちだった。

出航した。港の景色、灯台を目に焼き付けた。内海は穏やかな海だった。三浦半島辺りでイワシの荷積みして、水槽に入れた。別の水槽には水だけ入っている。そこに塩みたいな白いものを入れる。ブライン液と漁師さんは呼んでいた。そこに獲ったカツオを入れて後で水を抜くと冷凍されたカツオが残る。外海にでたところで、ブライン液をつくるための作業が始まった。大きく分厚い紙袋をリレー形式で運ぶ。私も列に加わって紙袋を受け渡ししていた。その時、ある漁師さんが叫んだ「あっ、こいつは駄目だ！はずしてやれ」私はフラフラだった。強烈な船酔いでろくにご飯が食べられていない。背中とお腹がぐっつくくらいに痩せこけていた。しばらく苦しい日々が続いた。持参した即席ラー

メンくらいしか喉を通らない。「おい、立教。死んだら鮫のエサにするぞ！」そんな励ましかたを受けながら、ミッドウェーあたりまで来た。なぶらだ！（カツオの群れ）一斉に進行方向の左側の船体から放水が始まる。ヘルメット、合羽を着用して「戦闘態勢」に入る。ベテランの方はとも（船の後方）に、中堅はおもて（前方）に、私や若手は左側の中央部に陣取る。足元のすぐ先は海だ。なんと、その時私だけがカツオを釣り上げた。まだ、小さいカツオだった。今から思えば、本格的な漁に入る前の予行演習的なものだったかもしれない。放水はすぐ止まった。しかし、その時はそんなこと考える余裕はなかった。それを機に私は変わった。ここで、多くの将兵が亡くなった。帰るべき母艦に帰れない飛行士の心など、様々な思いが駆け巡った。私にはそこで亡くなった方たちが励ましてくれたように思えた。「おい、おまえが釣ったカツオだ」料理長が刺身にして持ってきてくださった。

元気になった私は海亀を食べ、マンボウを食べ、イルカも食べた。海亀は首だけになっても棒切れに噛みつくことを知らされた。胴体部分の肉をアルミ製の大きなタライのようなもので煮ていた。「これ、食ってみろ」と促された。どこの部分か分からない、味付けも何もされていない、ただ白い身を食べた。あとで、「初めて船に乗った人間でこれを食べたのはお前が初めてだ」と言われた。皆に何となく受け入れられはじめた。嵐にも慣れてきた。船が真ん中から二つに割れるような揺れ方にも平気になった。けっこう重い細長い鉛のようなオモリの先に羽根と針が施されていて、竿を投げればカツオかかり、引っ張り上げると宙に舞い甲板に落ちる。一人が何十匹も一度に釣れる。ある時はそんな戦闘状態のさなか美しい夕陽が見えた。「なぶら」が来ないとただ、待機するだけ。万が一のことになってもそれは仕方ない、と覚悟を決め乗り込んだ船だったが、慣れてくると安逸な日々になった。私の戦いの場は船の中にはないと思うようになった。航海日誌がわりに付けていたノートの最後の方に「帰ったら剣道をやろう、高校の教師になろう」と綴った。何故そう思ったのかは今

も謎だが。操業を終え一路港に向かう。金華山に着くと聞いていたが、出航した焼津に着くことになった。日本の放送も聞こえてきた。月あかりの下をひたすら進む。灯台の灯が見えた時、涙がこぼれた。25日間の航海だった。上陸したとき、膝にガクンと衝撃が走った。

剣 道

船から降りるとすぐ故郷に帰った。無理をしていたのか、腰を痛めた。約1年後の7月から剣道を始めた。保谷にあった「劔持館」に通った。9月に初段をとり、翌年の10月に二段となった。十条の「建武館」にも通った。ここは昭和の剣豪のひとり大島治喜太のご子息の大島日出太先生が館長をされていた。日出太先生は小野派一刀流の「切り落とし」の名手であられた。私が先に面を打ちに行くのだが、途中で私の竹刀と先生のそれが交叉し、少しはじかれて、後から出される先生が早く私の面を打つ。先生との稽古はそれに終始した。全日本選手権の優勝者やベスト4の方も時折訪れ、稽古をつけてくださった。特に佐藤博信先生は戦艦が目の前にあるようだった。新宿体育館にも行った。善福寺の玄武館では昔なら武者修行のような形で稽古をさせていただいた。ここは北辰一刀流を受け継いでいる道場であった。画伯であられる小野重治郎館長ではなく、ご子息か、若手の方が相手をしてくださった。道場で二人だけの稽古だった。私の隙に見事に打ち込まれた。静かだが凜とした、品格のある剣道をされる方だった。猪武者のような自分が恥ずかしかった。

全く剣道三昧の日々だった。大学の勉強は日本文学科の小田切進教授のゼミを2年から4年まで受講、漱石を研究した。野口定男教授の史記と杜甫を3年4年と受講した。ホームのキリスト教学科では宗教学の恩師、鈴木範久教授の授業に熱心に出席したが、学科の勉強はほとんどおざりだった。

教職聴講（科目等履修生）

一応、卒業はできた。就職も一応内定をいただいた。金融関係だった。実は私は色弱である。大手の企業は軒並み色弱も不可で受験資格さえなかった。剣道絡みで警察も受験しようかと思ったが、色弱でこれも駄目だった。内定した企業は色弱可だった。通知を受け取った時、一瞬嬉しかった。しかし、同時に、何故か自分の10年先、20年先の道程が見えたような気がした。初めての経験だった。嬉しさより白けた思いが強かった。

石垣りん、という詩人が好きだった。その方も銀行員だった。私は同人誌に詩のまねごとを書いていた。また、簿記2級、珠算3級でもあった。自分なりに選んだ理由はあったつもりだった。ある日、神田の古本屋を散策した。金融関係の本棚を眺めた。今まで全く読んだことのない本がずらりと並んでいた。気が付けば、哲学・思想関係の本屋ばかり訪ねていた。内定は辞退した。

宙ぶらりんであった。大学院に行く学力はなかったし、学士編入も難しい状況だった。何とか学生でいられる道はないかと模索した。残る道は、教職聴講しかなかった。実は3年生から妥協して教職科目を履修した。しかし、全く興味を感じることができず、2、3回出席した後は全然出席しなかった。聴講生として残るかぎり、また、かつて放棄した科目を受講しなければならない。ここで、貴重な体験があった。エッカーマンの『ゲーテとの対話』を読んでいた。エッカーマンの少し偏狭で好悪のはっきりした性向をたしなめているゲーテの言葉に出会った。何か自分に言われているような気がした。かつて自分が放棄した先生の授業で、自分を変えるべく「実験」した。何とすばらしい授業だった。マッカーサーの農地解放が日本の再軍備防止とリンクしていたことに気づかされた。白いご飯を食べるのは盆と正月だけという貧しい小作農の次男以下の男たちの大量就職口は軍隊だった。歴史の見方を教わった。学部の時の私は全く何も見えていなかったし、聞こえていなかった。いわばコップに水がいつ

ばい入った状態だった。何も新たに入りようがない。なにか勘違いして思いあがっていた。

5. 高校教師

聴講1年目で教職科目、教科科目を取り終え、2年目は教育実習を6月に終え、8月に採用試験を受けた。故郷の徳島県では「倫理・社会」の募集がなかった。兵庫県と東京都の採用試験を受けた。二つとも合格したが、東京都の採用が早く決まった。都立K工業高等学校で校長面接があった。どういう訳か校長が玄関まで来られていた。靴も脱がず立っている私をじっと見つめられた。校長室に入るなり「まあ、教師というのは虚しい職業ですよ」と話し始められた。面接は終わったかのようにだった。「でも、私はあなたに決めました。これからあなた他からも話があると思うけれども、他には行かないように」と念を押された。望外のお言葉だった。「分かりました」と申し上げて後にした。

その日の夜か翌日は忘れたが、多摩地区の進学校からお誘いの電話がきた。「もう決まりました。ありがとうございます」と言って早々に切った。その話を同じアパートの都立某工業高校数学教諭に話したら「馬鹿だね、君は」と言われた。私の行く学校と話しが来た学校とでは「たいそう差がある、こういう場合はこうすればいいのだ」などいろいろ薫陶をいただいた。しかし、K工高に行かなければ今日の私があったかどうか……。また、そこで出会った生徒（もういいおじさん）とは今も付き合いがある。私の教師生活の原点である。

新米教師の日々

機械科4クラス、電気科、電子科それぞれ2クラスで1学年の生徒数は40×8で320名。1年目、3年生科目の「倫理・社会」を全クラス16コマ、「政経」を1クラス2コマ、1週間で18コマを担当した。機械科は1クラス、18名から

教師という仕事

24名位。電気科は平均25名前後、電子科も25名前後の人数だった。卒業生が本来320名のところ185名前後となる。135名くらいが退学している。1年生2年生はこれより退学者はその時点では少ないが、大よそ3年間で300人前後が退学する。留年させるとその者がクラスを「ひっかきまわして結局やめる」らしい。それでやむなく留年を認めない内規をつくった、とのことだった。その学校に1977年赴任した。

1年目、機械科のあるクラスで後ろの方の生徒が私に手招きをする。K工高で3年生まで過ごした猛者である。最も、もっと猛者は退学している。しかし、その生徒も十分迫力があった。何か？と近づくと、何と腕相撲をしようと腕を出す。その生徒は力自慢だったのだろう。けれども、私が勝ってしまった。これだけで私のステイタスは上がった、ようだった。ただ、各クラスの猛者から次々に挑戦を受けるはめになった。結果、ほぼ全員に勝った。一人だけに負けた。どこでも上には上がある。

同じ新卒で入ったある先生は教室から帰るなり、自分の椅子に座り込みうなだれて涙を流していた。生徒となにかあったのだろう。見て見ぬふりをするか、励ましにゆくか迷っている間にベテランの先生が肩をたたいて慰めていた。

2年目、クラス担任をした。入学式が終わり教室に入る。すでに春休み中に全員の顔と名前を覚えていた。生徒は驚いてくれた。小野寺先生の「名前、覚えよ～」の教えを実践した訳だ。ぐっと関係性が近くなった。ただ、その前に私が教室に入ったとき、教卓に生徒が持ち寄った真新しい「ぞうきん」の何枚かに血がついていた。誰がやった？などと追及しても現段階では無理と分かっていたので、深くは追求しなかった。

電子科の2組の担任だった。3年間同じクラスを担当した。機械科の生徒に比べるとおとなしい感じだった。入学者は38名だった。卒業生は30名、8名がいなくなった。そのうちの1名は転校だった。このクラスで文集を作った。表題は「めだかの学級」だった。生徒に言わせると「だれが生徒か先生か」と

いうことらしかった。

3年間で300人が退学する。1978年ころ、沖縄の教育研究全国集会（教研）で体育科のT先生が退学した生徒のその後を追跡したレポートを発表した。それがきっかけとなって、それでも教育かと多くのマスコミの関心を引いた。特に朝日新聞は学校に取材にきていた。女性記者の方だったと記憶している。後に『今学校で』というシリーズの1として、単行本にもなった。

上田薫先生との出会い

「教育音痴」の私もさすがに現実に直面し、学校とは、教師とは、教育とは何かを問うようになった。様々な教育書を読み漁った。そのうちに上田薫先生の著作と出会った。『ずれによる創造』『絶対からの自由——一病息災の教育理論——』というものだった。一気に呵成に読んだ。他の上田先生の著書も読んだ。「教育とは不完全な人間が不完全な人間にかかわる営みである」これまでの、特に徳商の先生たちとの関わりのなかで私が感じていた違和感が分かった。物事を知ることに「わからないことからわからないことへ」とあった。なるほどと合点した。

上田先生を立教大学に訪ねた。お会いして事情を申し上げた。次の授業からどうぞ、ということになった。「教育哲学」「教育方法」の学部の授業を聴講した。当時あった「研修日」を利用した。2年間の聴講生活を終え、自分も教師をやっているでもいいのだ、と思えるようになった。

大学院に入る

1年後、大学院に入学した。本格的に教育学を研究したいと思った。この時はすでに結婚をし、長男・次男は生まれていて、三男はお腹の中だった。妻の理解のもと大学院で研究ができた。現職のまま大学院生活を送った。今の制度のもとでは無理だが、当時はまだ可能な余地があった。後期課程まで終えた。

予備論文という制度があってそれに合格すれば満期退学となる。その口頭試問のとき、山村賢明教授から、「これ、博士論文に下さい」とサジェスチョンをいただいた。あまり必然性を感じなかったのでそのままに時が過ぎた。その論文を清泉女子大学の小野寺功教授に見ていただいた。「これは是非、本にしてください」と促された。鈴木範久教授に著作に関するご指導をいただいた。予備論文にはなかった、「林竹二」の項を加えるようご指導いただいた。出版社もご紹介いただいた。『新井奥邃の人と思想——人間形成論——』という本になった。人間形成論を付け加えることは鈴木先生のご高配による。宗教学、教育学、どちらの分野にも適応できるような本として世に出させていただいた。

6. 大学教師

明治学院大学文学部教職課程に奉職した。気が付けばもう23年が経過した。送る言葉をお寄せいただいた望月重信先生はじめ、教職課程の先生方にはほんとうにお世話になった。ここに改めて御礼を申し上げたい。また、私と関わってくださったすべての方々に感謝の意を捧げたい。

可能性を引き出すことと相対化すること

私は人間と教育について次のように考える。息を吸えば吐く、吐けば吸う。そうしないと生が保てない。飲食すれば排出する、排出すれば入れる必要がある。そうしないと死んでしまう。生きていればいつか死ぬ。死ぬから生きる。人間はいつも動的ななかにある。途上にある。プロセスにある。そこにあるのは可能性である。

その可能性を、よい方向に引き出すのが教育という営みだと考える。ただ、よい方向とは教育される側にとってのもので、する側のそれではない。教育する側、たとえば教師、国家は自らを相対化することが肝要である。たえず自ら

の正しさを疑うことが求められる。また、教えることは教わることでもある。

教える知識も相対化が必要だ。古代では天動説が「真理」とされていた。それが「学問」であった。また、近代でも時間と場所は絶対であったし、物質はすべて粒子によってなると考えられていた。しかし、現代では、時間と場所は相対的なものであり、粒子で物質の根源のすべてを説明できるわけではないことが、相対性理論や量子力学によって明らかになった。「学問」は「真理」の探究である。たえず「途上」にある、「プロセス」にある。「動的」なものである。量子力学などもまたその例にもれまい。この「プロセス」に、「途上」に、「学問」があり「真理」もある。

自らを、知識そのものを、「真理」そのものを、相対化することが肝要だと考える。自らも国家も知識も真理も途上にあつて、「成る」ことにおいて「在る」のである。

真理は絶対ではないか、神もまた絶対ではないか、そう思われるかもしれない。しかし、相対的存在を通して知る神は真に絶対であろうか。真理もまたしかり。真理や神は確かに在る。ただ、それはめざすものとして在る、と考える。求めつづける先に神はまします。

教師は教師と成ることにおいて教師で在る。絶対というならば、成るというプロセスこそが絶対である。絶対は動的である。相対性理論でいえば、速度が絶対で場所・時間は相対的なものである、と似かよっている。在ることは成ることであり、成ることが在ることである。私は私と成ることにおいて私で在る。私と成るプロセスに私は在る。

偶然と必然を超えて

「成る」ということのなかに、偶然も必然もある。偶然は必然となり、必然も偶然となる。私が色弱であったことも、人と出会ったことも、徳商に入ったことも、立教に入ったことも、かつお船に乗ったことも、ミッドウェーで回生し

教師という仕事

たことも、剣道に熱中したことも、K工高に奉職したことも、明治学院に奉職したことも、私が私と「成る」ことにおいて、必然であり偶然であった。

ただ、必然・偶然を超えて、見えざる手によって、私は私と「成り」、今も「成りつつある」。そこに大きな力の働きを感じる。私はこの大きな力・大きな慈愛（恩寵）に導かれて、今ここに「在る」。これからも「成る」ものとして。

このエッセイを書いている年、2019年10月に母が亡くなった。このエッセイを亡き父母とこれまで共に歩んできた妻に捧げたい。